

実践レポート 4

ノウハウゼロからオンライン授業を実現 どこでもドア[®]を手に入れた中学校

長野県白馬村立白馬中学校



怒濤の10日間を赤裸々に語ってくれた白馬中学校の浅原昭久校長。幾度となく挫折しようにもなったが、「できる」という強い思いが、奇跡的な出会いを手繰り寄せ、乗り越えたことが何度もあったと話す。

教職員のほとんどがオンラインの「オ」の字も知らなかった中学校に、突然持ち込まれた授業のオンライン化の話。一斉休校という初めての体験をした教職員たちは、当惑しながらも「こんないたたまれない思いを二度と体験させない」と一途に取り組んだ。10日間であらゆる課題を乗り越え、オンライン授業体制を確立した白馬村立白馬中学校（生徒数204名）は、気がつけばGIGAスクール時代を牽引する存在に。オンライン時代の先を見据えた教職員像、学校像を同校の浅原昭久校長に伺った。

ゼロからの構築—— 怒濤の10日間の始まり

昨年春の全国一斉休校期間が明けて間もない4月10日の金曜日。長野県白馬村在住

の草本朋子さんが同村の白馬中学校を訪問し、いきなりこう切り出した。

「オンライン授業を始めませんか？」

聞き慣れない言葉に、白馬中学校の浅原昭久校長は思わずこう返すしかなかった。

「オンラインって何ですか？」

草本さんは2022年度開校予定の「白馬インターナショナルスクール」の設立準備財団代表理事で、国内外にネットワークをもつ人物。白馬村の教育には特別な思いを抱いていた。

「休校期間に湧き上がったいたたまれなさや無力感をもう味わいたくない」

そう感じていた浅原校長は、そんなオンライン授業の提案に、やれるかどうかではなく「やるしかない」と瞬時に決断。「子どもたちの学びを止めてはいけません。ただ

タブレットを生徒に配布した。

22日には、オンライン授業に使う教材

「e-board」による研修を開始。さらに、地元関係者を交えてオンライン授業の環境整備を詰める話し合いを行った。ここで浅原校長は武藤さんから、5か所のホテルでのオンライン授業承諾と、懸念していた通信トラブル時の対応について、地域で無償の「トラブル駆けつけ隊」を結成したとの報告を受ける。駆けつけ隊は、村内の有志6名から成り、オンライン授業中に通信トラブルなどが起こった際、生徒が電話すれば隊員が駆けつけサポートする。

「この時代に、個人の電話番号を公にして、子どもたちが授業を受けている間、いつでも駆けつけられるようにずっとスタンバイしているわけです。いま思い返すだけでも目頭が熱くなります」

23日には、科目ごとのオンライン授業チームを結成し、具体的な授業準備を進めた。翌24日には、チームごとにオンライン授業のリハーサルを繰り返した。

オンライン時代の教職員の価値 それは「対話」を引き出す力

その思いだけで突き進む決断をした。週明け13日の朝。浅原校長は全教職員の前で「オンライン授業の準備をします」と宣言。午後には、草本さんから紹介を受けた大手IT企業出身のシステムエンジニア、石田幸央さんが来校し、同席した村の教育委員会の担当者とともにタブレット端末のインフラ整備の話し合いをもった。2日目にはZoomの授業への導入準備を開始。教職員らは必要な準備や知識を都度都度理解していった。翌日には、理科の清原佳明教諭がオンライン授業例をいきなり実演してみせた。「清原先生はZoomがどんなツールであるかは前日まで知らず、とにかくやってみよう」と授業の叩き台をつくってくれたのです。その姿勢は先生方の不安をかき消してくれました」

4月27日から白馬中の「学びを止めない分散登校型」オンライン授業が始まった。オンライン授業では国数英理社を行い、他の実技教科やオンライン授業で対応できなかった内容を登校時に実現するようになった。当初は通信トラブルも起こったが、駆けつけ隊の奮闘や生徒の素早い理解もあり、10日間ほどでトラブルはなくなった。同校では「対話」を大切に考えている。対話は、新学習指導要領の大命題である「主体的・対話的で深い学び」にも示されているが、浅原校長がオンライン授業導入にあたって、より強く意識したテーマだ。

対話的な学びを実現するために、同校のオンライン授業には一つのフォーマットがある。最初に「学習問題・問い」を掲示し、生徒に「予想」させ、その予想を「全体共有」する。そこからさらに「課題などを明らかに」して、「ブレイクアウトセッション」という小グループでの話し合いを行う。そこで「まとまった意見を全体共有」し、最後に「ラーニングマップ」に落とし込むのだ。このフォーマットに則り、教員はオンライン教材を使いながら、パワーポイントや動画、自作教材など独自の工夫を加え、

また同日、白馬村で正式に予算がつき、タブレット端末の持ち出しとセキュリティに見通しがついた。

だが4日目の16日、緊急事態宣言が全国に拡大。再び休校となることを懸念した浅原校長は「オンライン授業の道筋」を作成し、翌17日にはこれを各家庭に配布した。同日夕方草本さん、石田さんなど地域の指導役を招き、オンライン授業の環境構築について詰めていった。

最大の問題は、家庭での通信環境をいかに平等に構築するかだった。となれば通信環境の整っていない家庭へのルーターの貸し出しや通信費の負担は必須。しかし、村がそれを負担することは難しい。すると参加していた同村のホテル総支配人の武藤慶太さんが「子どもたちが最寄りのホテルのWiFiを使ってオンライン授業を受けられないか、声をかけてみる」と応じた。

20日には分散登校での授業が開始された。長野県では全面休校とした学校が多かったが、「オンライン授業を身につけ、自律的な学習を確立するためにも分散登校にした」のだった。同日、「オンライン授業の手引き」を完成させ、21日には手引書と



オンライン授業の様子。授業だけでなく、イベントや
会合、研修、懇談会、ちょっとした時間を使ったミーテ
ィング、チャットなど、コミュニケーションの密度は上
がっている。

これからの学校は 地域づくりの核になる

一連の取り組みで浅原校長が痛感したのは、個々の教職員がもつ子どもたちへの思いと、そこから生まれた高い突破力、子ども

だと認識するようになっていった。

たとえば、以前はなかなか難しかった外部の講師を迎えての特別授業や講演などもやりやすくなった。また総合的な学習の時間の授業では、SDGs活動で先進的な活躍を見せる3人の高校生を、長野市・上田市・東京都の3か所をつないで実施した。

オンラインツールは授業の時短、 生徒の思考を見える化する

特に教員が意識しているのが、生徒の予想や課題をチームで書き出すブレイクアウトセッションだ。教室での授業であれば、どんな意見交換が行われたのか、発表まではわかりにくいですが、オンラインでは生徒の手元の書き込みが表示されるので、作業の進捗がリアルタイムで確認できる。教員だけでなく生徒間の共有もしやすい。

また、パワーポイントが黒板代わりとな

るため、打ち込まれた生徒の意見などは、そのままコピー&ペーストで表示でき、授業がスムーズに進む。

理科などの実験授業では、教員が自作動画を流す例も増えた。動画なら実験テーブルの周りに生徒を集める必要もなく、実験が見づらいという生徒もなくなる。

オンラインでは生徒の意見や感想などは随時タイムラインに書き込まれるため、個々の生徒の理解度やクラス全体の理解レベルも把握しやすくなる。特に若手教員は、メイン画面で生徒に解説をしながら、タイムラインに流れてくる個別の生徒の質問に回答を打ち込むことなどもしているという。

ベテラン教員も、事前に手書きのシートを用意し、そこを専用カメラで映し出して解説をするなどの工夫を凝らしている。

「大きなフレームは決めますが、細かいことは決めていません。それぞれの教員がやりやすいやり方で、対話的で深い学びを表現していけばいいと考えています」

感染リスクを避けながら 東北への修学旅行を実現

オンライン授業でのトライアンドエラー

もたちの順応性の高さ、そして地域の人々とのつながりの強さだ。同校では昨年7月に1年生の総合でラフティングなどのアウトドア体験を行ったほか、8月には1、2年生134名が3コースで唐松岳登山を体験している。いずれもアドベンチャークラブや山案内組合などの地域の人々の理解と協力があつたからこそ実現だった。

同校が昨年6月に行った学校の取り組みに対してのアンケートでは実に80%以上が「とても良い」と回答、「良い」を含めると95%を突破した。

2021年度は、新学習指導要領の理念に基づいて教育の本質をとらえ、必要な意識を学校全体で醸成することと、子どもの学びをさらに豊かにするための取り組みを進めていくという。

「教員それぞれに授業のアプローチの方法があつていいと思いますが、理念は同じでなくてはなりません。それが本校では、子どもや地域の思いを大事にしながら、子どもたちの生活を豊かにすることです。オンライン授業はあくまでも、それを実現するためのツールの一つです。ただ、その構築によって、教員が『困難なことがあつても

を重ねるうちにそれぞれの教員の授業内容は確実に充実していった。浅原校長は「教員が明らかに自信を深めていった」と目を細める。

他校が取りやめにするイベントなども知恵を出し合うことで実現している。4月下旬にはオンラインで生徒総会を開催。役員は生徒が学校に集まり、他の生徒は自宅や最寄りのホテルから参加した。ほかに、保護者向けの研修会、授業参観、保護者懇談会などもオンラインで実施された。

極めつきは修学旅行だ。県内の小中学校が続々と取りやめを発表するなか、早い段階から保護者の了解を取りつけ、行き先を感染リスクの低い、震災のあつた東北地方に変えて実現した。生徒たちは震災で家族を失った被災者となつないでオンラインでの事前学習を行い、知識と共感を広げた。保護者とは修学旅行の意義や目的について説明を重ねて、「もし現地で感染が発覚したら、たとえ夜中でも保護者が現地に向かう」ということを承諾してもらつたという。

白馬中学校の教職員たちは次第にオンラインツールが従来の授業の代替手法ではなく、世界や未来につながる『どこでもドア

できる』という自信をつけたことは間違いない。今後は、さまざまなものを活用して地域とのつながりをさらに発展させ、子どもの豊かさに貢献していくことが学校の使命だと考えています」

今年度の学校経営ビジョンを「子どもや地域への貢献」と設定。社会に開かれた教育課程の実現も進めていく。

「学校が頑張れるのは保護者や地域の人たちとのつながり、信頼があつてこそ。それを一連の取り組みが気づかせてくれました。当然、学校教育としての枠があります。必要なのは、地域の生活や社会、世界とのつながりのなかにあると思うのです。学校はもっと自由になつていいと思います」

同校では地域の生活、環境向上に取り組むSDGsのサークルやラポを発足させるほか、子どもたちの主体性や自由を尊重し、夏期間間の私服登校も検討中だという。

「ICTによる教育をさらに発展させながら、地域が望む白馬をつくることに学校が中心となつて挑戦していきたい」

オンラインツールという『どこでもドア』を手に入れた校長は、こう力を込めた。